

令和5年度

海外社会貢献活動

(ガーナへの物資支援ボランティア)

報告書

岡山県立倉敷青陵高等学校

サッカー部顧問

木村 哲也
河原 寛太

社会貢献活動（ガーナ）報告書

1. 活動の目的

本校の掲げるグローバル化社会を生き抜く人材の育成に向けて、高校生が社会や世界と繋がる機会を提供し、その中で出てきた社会や世界の諸課題の解決に向けて、何ができるのかを模索しながら社会貢献していくことを目指すことを目的とする。

2. 活動目標

発展途上国への支援について、高校生が出来る範囲について生徒自らが考え、実行する。

3. 対象国

ガーナを含む発展途上国

4. 活動者

岡山県立倉敷青陵高等学校サッカー部、活動に賛同してくれる本校生徒

5. 実施した活動

- ・現地（ガーナ）とのオンライン交流会 3回
- ・世界の現状を知る講演会 6回
- ・社会貢献について考えるミーティング 4回
- ・物資支援の企画と運営
- ・現地（ガーナ）への渡航（12/24~1/3(11日間)）
- ・渡航時のオンライン交流会 2回（時差9時間）
- ・実践報告（報告会実施&報告書作成）

6. 活動日程・今後の予定

令和4，5年の活動で主だったものは以下のとおりである。

令和4年

- 6月 6日（月）グローバル講座（木村：顧問）
- 6月16日（木）グローバル講座「ブラジルの文化とサッカー講座」（小林弘典氏：クルゼイロジャパン総括責任者）
- 7月 8日（金）グローバル講座「サッカーにおける共通言語講座」（木村：顧問）
- 7月14日（木）グローバル講座「ドイツのサッカーと文化講座」（木村：顧問）
- 9月26日（月）グローバル講座「イングランドのサッカーと文化講座」（オースティン：本校ALT）
- 10月 7日（金）サッカー分析講習会（Knows竹内氏）
- 12月22日（木）サッカー分析講習会（久永啓氏：岡山理科大学）

令和5年

- ① 1月19日(木) グローバル講座「森下仁道氏オンライン講演会」(プロサッカー選手)
3月17日(金) サッカー分析講座(筑波大学体育会蹴球部)
3月26日(日)～28日(火) グローバル合宿(青陵、城東、倉敷南、操山)
4月 1日(土) グローバル講座「ブラジルクルゼイロコーチ(アドリアーノ)による1DAY
クリニック」
5月12日(金) デルカジョルダーノ氏(伊)訪問開始(週1回来校)
 - ② 10月 5日(木) ガーナへの物資支援発足ミーティング
 - ③ 10月19日(木) 社会貢献活動ミーティング
 - ④ 10月25日(水) ガーナへの物資支援打ち合わせミーティング
 - ⑤ 11月11日(土) オンラインミーティング(鳥越敬子氏:ガーナ在住 JICA 保健師)
11月20日(月) グローバル講座「イタリアのサッカーと文化講座」(デルカジョルダーノ氏)
 - ⑥ 11月28日(火) オンラインミーティング(中野誠也氏:大宮アルディージャ)
 - ⑦ 11月30日(木) 支援物資クリーニング&Ali氏オンラインミーティング
 - ⑧ 12月 4日(月) KSB取材
 - ⑨ 12月24日(日)～令和6年1月3日(水) ガーナへの渡航
 - ⑩ 12月27日(水), 30日(土) ガーナとのオンライン中継
- 令和6年

- ⑪ 1月29日(月) 報告会
3月18日(月) 筑波大学分析講習会
3月26日(火)～28日(木) グローバル合宿(青陵、城東、倉敷南、操山、芳泉)
9月上旬 青陵祭展示&寄付金集め

7. 活動内容詳細(丸数字のもの詳細)

令和5年

- ① 1月19日(木) グローバル講座
「森下仁道氏オンライン講演会」(ガーナで活躍するプロサッカー選手)

本校66期卒業生である森下仁道氏の講演会を行った。森下氏は2025年クラブワールドカップでアフリカ代表として出場することを目標に、現在はガーナ共和国, Cape Coast Ebusua Dwarfs FC所属のプロサッカー選手として活躍されている。2020年には筑波大学在学中に文部科学省が主導する官民協働留学促進キャンペーン「トビタテ!留学 JAPAN」で最優秀賞と特別賞受賞。講演会ではアフリカでの生活や日本とのギャップ、留学について、世界で活躍するためにはなど、幅広くご講演いただいた。この講演会は本校の土曜活用の講座として部員以外に5名参加した。

② 10月 5日（木）ガーナへの物資支援発足ミーティング

現地での物資不足の現状を聞き、サッカー部として何ができるのかを考えるとともに、継続した支援活動とするためにアイデアを議論した。夜には森下氏、顧問、企業（Play Sports）の3社で支援物資の集め方や支援の方法や時期をミーティングした。

Play SPORTS にリユース BOX を設置すること、集めた物品を青陵高校生が選別&クリーニングし、梱包作業を行うこと、森下氏に実際に現地へ届けるプランをコーディネートしていただくことを話し合った。

③ 10月19日（木）社会貢献活動ミーティング

現地への支援の現状をさらに調べるとともに、支援の在り方や青陵高校としての付加価値のつけ方などを高校生で考え、今後のスケジュールを確認した。高校生からは付加価値のつけ方として、2次元バーコードを印刷したものを支援物資に貼り、読み込むと校歌が流れたり、青陵高校や倉敷市のHPに繋がるようにするとPRになるというアイデアや、日本の絵本を英語に翻訳して届けるなどのアイデアが生まれた。

④ 10月25日（水）ガーナへの物資支援打ち合わせミーティング

ガーナへの物資支援ボランティアが進む中、届け先が決定し、どんな支援物資が本当の必要か、また、どういう風に届けるかのアイデアを出し合った。森下氏にも協力していただき、より具体的な方法を議論した。現地では上着よりも履物の方が必要であること、ただ送るだけでは履物を買って生計を立てている人の収入を奪ってしまう可能性があることなど、よりリアルな現状をお聞きすることで、本当に継続性のある支援とは何かを考えさせられた。

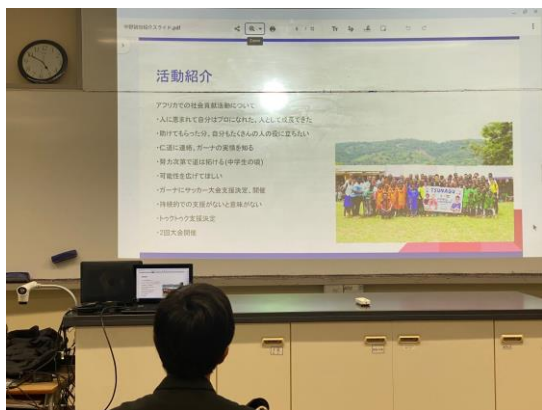
⑤ 11月11日（土）オンラインミーティング（鳥越敬子氏：ガーナ在住 JICA 保健師）

現地（ガーナ）で実際に働いている JICA 協力隊員の鳥越氏（本校 OG）とオンライン（ガーナ）を繋ぎ、ガーナの食文化や気質、医療現場での経験や、価値観についてご講演いただいた。日本との考え方の違いや生活の質の違いを目の当たりにし、大きな違いを知るとともにボランティアを行う上での注意点も考えさせられた。これから物資支援をするにあたり、本当に必要なものを必要としている人たちにきちんと届けるために何が大切なのかを考えさせられた。この講演会は学校全体に連絡し、本校の土曜活用事業の一環として開催し、部以外から3名参加した。



⑥ 11月28日（火）オンラインミーティング（中野誠也氏：大宮アルディージャ）

実際に海外支援を行っているJリーガーの中野氏のオンラインで繋ぎ、公平な物資支援の仕方や、自分の職業を通しての社会貢献の在り方を講演いただいた。中野選手には、プロサッカー選手になったきっかけや、海外物資支援ボランティアを行うに至った経緯をご講演いただき、実際に支援するにあたっての注意点や難しさを分かりやすく教えていただいた。



⑦ 11月30日（木）支援物資クリーニング&Ali 氏オンラインミーティング

Play SPORTS に集まったスパイクなどのリユース品を、実際に使えるものと廃棄するものを選別し、支援物資として届けるものをクリーニングする作業を行った。クリーニングは Play SPORTS の原田さんにお越しいただき、レクチャーを受けながら丁寧に磨き上げた。支援する物資はスパイクやシューズが40足、Tシャツやゲームシャツなど20枚、サッカーボール5球とした。



クリーニング作業後は、現地（ガーナ）の NGO である Ali Royal Surf & Soccer Foundation 代表の Ali Yakubu 氏にオンラインで繋ぎ、ガーナの現状や、クラブハウスの様子を映してもらいながらお話をいただいた。Ali さんはサッカーやサーフィンを教えながら勉強も見る財団を運営して

おり、アカデミーにいる100人の子供たちの中でスマートフォンを持っているのは10人いないことや、所持しているが、データ通信量が払えないために通話ができない子がほとんどだということを知っていただいた。Aliさんもこのオンラインのために通信料をプリペイドで別途購入してくださるなど、当たり前前にオンラインで繋がることができると思っていた私たちにとって、ガーナの現状はあまりにも想像とは異なるものであった。スパイクとは呼べないランニングシューズ、25人の選手にボールは3つ、1食40円の朝食すら買えない子供たちの存在。Aliさんの語るガーナの子供たちの現状を目の当たりにできた貴重な時間でした。このボランティアが継続して行えるような支援について、またどう届けるか良いのかなどを今後の課題としてミーティングを行っていきたいと思う。

⑧ 12月 4日（月）KSB取材

12月4日（月）Play SPORTS 倉敷店にて、Play SPORTS 竹波社長、森下仁道氏、塩見琢磨（1年）、顧問でKSBの取材を受けた。海外支援ボランティアへの思いを伝え、この活動が地域そしてサッカー界全体に広まることを期待していることを伝えた。

⑨ 12月24日（日）～令和6年1月3日（水）ガーナへの渡航

スケジュール

		出発	場所	備考
12月24日	日	15:40	関空→羽田→成田	
			成田→仁川→アディス アベバ→アクラ	
-1DAY		11:20	アクラ着	
12月25日	月	12:00	現地合流	森下、岸（車手配）
		15:00	宿休憩	
		20:30	宿へ	
12月26日	火	AM	アクラ マコラ市場	マコラ市場、Independence Area, Accra Zoo, Aburi 植物園観光、ガーナの料理体験
		PM	Great Olympics	練習見学、アクラモールでの買出し
12月27日	水	AM	Medina	アフリカ布染物体験、12:00～中継（青陵高校）
		PM	Independence Square	アマンダ（日本人商社マン）、和田（JICA）
12月28日	木	AM	宿舎	渡航メンバー打ち合わせ
		PM	現地視察	アグボグブローシー（ゴミ山）、野口英世研究室見学
		18:30	会合	柴田（JETRO）、梅木（協力隊員、古城池卒）、 犬飼（JOCV）
12月29日	金	AM	Cape Coast Stadium	視察
			Kakum National Park	観光、昼食、散策（16時閉園）
		16:30	Ali Academy	視察、練習参加
12月30日	土	朝		Division2練習参加
		10:00	Cape Coast城	観光
		13:00		サッカー大会、13:00～中継（青陵高校）
12月31日	日	AM	Ghana division 2	stadium見学、振り返りミーティング
		PM	ワニ公園、在日日本人	観光、秋山（住友商事所長）
1月1日	月	AM	在日日本人会合	柴田さん、長岡（東京医科歯科大学）
		PM		FREE
1月2日	火	9:20	空港着	
		12:20	アクラ発	
1月3日	水		帰国、帰岡	

⑩ 12月27日（水）ガーナの日常と渡航の様子の中継

12月30日（土）サッカー大会の様の中継

⑪ 令和6年1月29日（月）塩見琢磨（1年）、河原寛太（顧問）のガーナ渡航報告会

8. ガーナ滞在記 (河原寛太)

私は今回のガーナ渡航が初めての海外であった。この渡航の感想を一言で表すのであれば、「こんなにも何もかもが日本と違うのか。」である。初めての異文化体験を時間の経過とともに書いていきたい。

まず、ガーナ渡航にむけての準備だが、パスポートだけでなく、ガーナに渡航するには、あの野口英世が研究していた黄熱病のワクチンを接種し、接種証明書(イエローカード)を取得しなければならない。また、ビザもガーナ大使館に申請し取得した。

準備も整い、いよいよ渡航の日を迎えた。関西国際空港を出発して羽田空港に到着し、成田空港からガーナに向かった。途中、仁川(韓国)、アディスアベバ(エチオピア)を経由し、29時間30分のフライトを経てガーナに到着することができた。

到着した瞬間から日本との違いをひしひしと感じた。まず気温だ。日本は5℃前後だったが、ガーナは赤道付近に位置しているため、35℃もあった。空港のトイレですぐにダウンを脱ぎ、半袖半パンに履き替えた。次に驚いたのは交通面だ。車は右車線であるし、何より速度も一般道で常に100キロ近く出しているため、常に恐怖していた。また、信号待ちの時には子どもに車を囲まれたことがよくあった。その子どもたちはニジェールからの難民で、彼らは頼んでもないのにモップで車を磨き、お金を要求してきた。金銭的に恵まれていない貧しい子どもたちを初めて目の当たりにして、少し胸が痛くなった。

ただ、想像と違ったのは、首都アクラは高いビルが見られたり、スマホを触っている人が多かったことだ。発展途上国への支援は首都などの都市に集中することが多いので、近代化が進んでいるようだ。

2日目のランチからガーナ料理を食べた。主食はバンクー(プランテンとトウモロコシを練って発酵したもの)やフフ(キャッサバとトウモロコシを練ったもの)といった日本の柔らかい餅のような感じだったが、独特の酸味が強く、なかなか手が進まなかった(ガーナではこれらを指を使って食べる)。また、ティラピアという川魚や山羊のスープなど日本では食べる事ができないであろうものなので、非常に良い経験になった。

午後には Accra Great Olympics (ガーナー一部リーグに所属するサッカーチーム)の練習を見学する機会を頂いた。練習の開始時間は14時からと伺っていたが、15時前から始まり、正直、全体的に練習もダラダラしているという印象だった。なぜここまで練習に対する取り組みが低いのか聞くと、社会全体にもいえるそうなのだが、昇給制度がほとんど無かったり、給料未払いがたびたび発生するからという理由が多いようだ。しかし、要所でみられたアフリカ人特有のスピードやフィジカルの強さは迫力があり、目を見張るものがあった。

29日からはアクラから車で3時間ほど離れたケープコーストという都市に拠点を移した。驚いたのはアクラとの景観の差だ。高い建物は存在せず、家もトタン屋根で作られていたり、道路もボコボコと穴



が空いているなどインフラの整備にかなりの差を感じた。お世話になる NGO 団体が運営するサッカーチームでは指導もさせてもらった。当然英語で伝えないといけないため、カタコトの英語でコーチングした。すると子どもたちは身振り手振りで伝えようとしている私の姿を見て、素直に聞いてくれ、練習も盛り上がる事ができた。

そして、いよいよ渡航のメインであるサッカー大会の日を迎えた。サッカー大会は「少年男子の部」「成年女子の部」「成年男子の部」の3カテゴリーで開催することになった。どのカテゴリーも白熱した試合展開で手に汗握る場面が多かった。試合が終わると青陵からの支援物資（サッカースパイクやボール、ジャージなど）を贈呈した。この地域に住む子どもたちの多くの服装を見ると、服は穴が空いていたり、明らかに大人用を着ていたり、特に靴はサッカースパイクではなく、ボロボロにすり減っていたり、靴を履いていない子どもが多かった。だからそのような子どもたちにプレゼントすると、すごく喜んでくれて支援をした甲斐があったなと実感することができた。このようにサッカー大会・支援物資贈呈は大盛り上がりで終わることができた。



その後、アクラに戻って年越しを迎え、現地時間2日にガーナを立ち、日本時間3日深夜に日本に無事帰ってくる事ができた。

今回の渡航で最も考えさせられたことが支援の難しさだ。支援物資を渡せたのは、チームの中でも一部の人のみだった。だから物資をもらえなかった子どもたちからは、「See! Give me!」とせがまれた。なかなか難しい課題ではあると思うが、理想はチームの人たち全員が平等に感じられるような支援をしていきたいと思う。広い視野で見直すと、「日本からの支援物資によって、ローカルで売れるはずだったスパイクやボールが売れなくなると、スパイクやボールを販売している人が収入を得ることが難しくなる。」といった面も反省事項で挙げられた。また、アクラにはアグボグブローシーというゴミ山が存在する。このゴミ山は先進国から送られてくる支援物資（特に電化製品）がアクラで飽和し、ゴミとなり不法投棄されることで形成されたそうだ。更に先進国がガーナ



のインフラを整備（道路をつくるなど）する際に発生した鉄くずなども処理しきれず、捨てられてしまっているようだ。このように我々は表面上では良いことをしているつもりでも、実は課題もたくさんまれていることを認識することができた。

このガーナ渡航ではコーディネートして下さった森下仁道さんをはじめ多くの方にお世話になった。彼らへの感謝の気持ちを忘れず、今回課題として持帰った「支援のありがた」をサッカー部内で共有し、持続可能な支援の方法を熟考していきたい。

9. まとめ

生徒の主体性が重要視される時代ではあるが、ゼロベースでは生徒たちは何をしてよいのかも分からず、そのベクトルも多岐に渡り、方向性が定まらない。部活動は義務教育では外部委託に向かい、高等学校においても主体性と個の居心地の良さはマストアイテムとなっている。部活動の存在意義そのものが時代と共に変化しつつあるからこそ、倉敷青陵高等学校サッカー部では世界の文化や歴史に触れることで本校の掲げるグローバル人材の育成に向けて、部活動として何ができるのかを考え、部活動の新しい意義付けを考えた。この活動を通して、社会や世界の中の自分の立ち位置や活動意義を生徒自らが見出すことで、部活動をより主体的に行う仕掛けになればという思いのもと行った。この活動自体は部活動に特化したものではなく、クラスで、学年で学校全体で、あるいは少数のいかなる集団においても可能なノウハウとして示すことができるのではないかと考える。活動の目的は、①外の世界を知ることによって自身の立ち位置を客観視し、進路実現に向けた方向性を見出すこと（ベクトルを外へ）、②自分ではない他のために動くことの充実感や、社会貢献に触れる機会を通じて将来の自己実現に向けたプランを思考すること（ベクトルを内へ）である。サッカー部として視野を広げる様々なプログラムは令和4年度から行ってきた。ガーナへの物資支援はその一例である。好きなスポーツを介して集まっているという、一つのベクトルが合った集団だからこそできる活動や社会貢献を通して、将来社会参画していく上で必要なノウハウやヴィジョンを根付かせることを目的とした。

また世界の文化や歴史、社会や世界の諸課題を知ること、生徒自身が何をすべきか、何が必要かなどを自ら考え、行動を起こしてくれることも目的とし、そのきっかけの提供を行った。過去にはドイツ、イングランド、ブラジル、イタリアなどの文化や歴史、サッカーに触れる講演会や実技を实践した。学校全体にも周知し聴講生も募った。また、高大連携という観点からスポーツを通じて大学と繋がる機会も設けた。高知大、岡山理科大、筑波大とコラボし、分析講習会やトレーニングディスカッション、座談会を行った。この取り組みは、同じ境遇の普通科進学校にも案内し、岡山県全体の競技力アップに貢献していくことを目的として行った。また普通科進学校5校による合同グローバル合宿も過去3回実施し、成果を上げている。合宿では教科学習や英語のスピーチなども盛り込み、ただスポーツを行うだけの合宿とは大きく異なるプログラムを取り入れている。チームビルディングやグローバルワークも取り入れ、異文化理解や進路実現に必要な情報提供も行っている。また地域の文化に触れる体験や防災、社会貢献、レクリエーションを通じたアサーティブコミュニケーションの取り方なども行い濃密な2泊3日のプログラムとなっている。これらの取り組みは部活動を通じて行うことが学校全体で行うより機動性が良く、プログラムの意義や目的を達成しやすい。協力体制も構築しやすく、効率も良い。同じ競技だからこそ可能である。また講演会などはオンラインで繋がるのが容易にできる時代だからこそ、どの集団でも活用できるノウハウである。ただ、やはり実際に現地に赴くことが一番の経験に繋がるとし

て、今回は実際にガーナに渡航して手渡しで届けるプログラムを最終目標と位置付けた。課題はスケジュール調整と資金調達である。海外渡航を視野に入れた活動を今後も継続して行うには、活動費用をコンスタントに捻出できる仕組みが必要である。また、学校や部活動として活動していくにあたり、青陵高校サッカー部が行ったという付加価値のつけ方なども今後の課題である。最後に、この活動全般にわたり、多くの方々の支援やご助言をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。